

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>  
 E-mail: [comm.tko@nsk.org](mailto:comm.tko@nsk.org)  
 PHONE: 03-3433-0987  
 FAX: 03-3433-8678  
 Diocese Office



第60号

(通巻1295号)

2022年4月17日

編集：広報委員会

委員長：渡辺康弘

日本聖公会東京教区

港区芝公園 3-6-18

《イースターメッセージ》

復活 — 希望の先駆け —

司祭 マリア・グレイス 笹森 田鶴

主のご復活のお喜びを申し上げます。キリストは実に復活されました！わたしたちは大いなる喜びを今共にしています。

しかし聖書は、最初から人びとが喜んでいただけではないことを伝えていきます。ルカ福音書は、女性たちが主イエス様の亡くなられた様子をじっと見続けていた様子を描いています。女性たちはご遺体がありマタヤのヨセフによって運ばれ、新しい墓に葬られたことを見届けていました。家に帰って香料と香油を準備し、安息日を通り過ぎるのを待ち、次の日の朝太陽が昇つてすぐに、準備していた香料を持って急いで墓にやって来ます。香料も香油も主イエス様への思いのしるしです。そのしるしでせめて何かをして差し上げたという一途な思いで墓に到着します。誰よりも早く到着したはずでした。しか

し、すでに墓は空でした。主イエス様の死によってすべてが終わってしまってもなお、力を振り絞って自分たちのできることをようやく見つけ、すでに動かない主イエス様



のご遺体への思いやしるしを持参した行為は無に帰してしまいました。絶望の後、さらに彼女たちの思いは失望となつて砕け散りました。すべてが手遅れに終わったように思えました。けれども神さまのみ業は人間の思いや行動よりも早かったの

です。

この不意打ちに驚き途方に暮れている女性たちに、輝く衣を着た二人が問いかけます。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。」そして共に過ごしていた時に主イエス様が語っていた言葉を「思い出しなさい」と促します。ようやく女性たちはそれらの輝いていた日々ので出来事や主イエス様の言葉を思い出します。

神のみ言葉は必ず実現します。神のみ言葉を体現しているキリストは神のみ心そのものですから、主イエス様の語っていた言葉も必ず実現します。そして受胎告知でマリアが天使に応えたように、神のみ言葉はその通りに自分たちに実現したのです。そのことを女性たちは理解しました。そして主が語った通り、復活されたことを知ったのです。女性たちは大いに変えられました。香料は手放され、もはや死者の中にキリスト

を留めることはしません。絶望や失望は、キリストの言葉に裏付けされた出来事によって希望と喜びとなりました。彼女たちは生きている方を生きている者の中に見出したのです。

神は先駆けて復活の希望を示してくださいませ。女性たちがそうであったように、後からわたしたちも追いついていきます。そして絶望と失望の世界の先で、神はわたしたちを再度立ち上がらせてくださいます。その喜びを全世界の人びとと共にしたいと心から願い、神の正義と平和の実現のために教会が用いられますことを切に祈り求めます。

東京教区でのこれまでの長い時のすべてにおいて、心からの感謝を神さまと皆さまにお送りします。わたしたちの信仰の旅はこれからも続きます。それぞれの場所において、み言葉の通りに復活のキリストと出会うのです。

キリスト、実に復活！  
 (北海道教区主教被選挙者)

シリーズ 北関東の教会 ①  
**せうぞ、おいでください!**

この度東京教区広報委員会の方々が、本年発行4回の  
 コミュニオンで北関東教区の教会を紹介する企画を立て  
 てくださり嬉しく思っています。



北関東教区は茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県の4県がエリアとなっており、それぞれを茨城伝道区、栃木伝道区、群馬伝道区、埼玉伝道区と呼んでいます。今回は、茨城伝道区4教会、栃木伝道区4教会および小山祈りの家、群馬伝道区6教会、埼玉伝道区8教会および立教学院聖パウロ礼拝堂を、4回に分けてご紹介させていただきます。

北関東教区には特徴ある教会が数多くあります。ロマネスクに近いゴシック様式の石造りで建てられた栃木伝道区の日光真光教会、昨年話題となった渋沢栄一ゆかりの煉瓦を用いて建設された埼玉伝道区の熊谷聖パウロ教会と川越基督教会、大宮初の鉄筋コンクリートの建築となった大宮聖愛教会など、また施設の中で宣教活動を担ってきた群馬伝道区の榛名聖公会、ハンセン病療養施設の栗生楽泉園(くりゆうらくせんえん)内にある聖慰主教会、そして地域の幼児教育を使命として担ってきた幼稚園を併設している教会も数多くあります。

今回の紹介を通して、北関東教区諸教会を東京教区の皆様には是非訪れていただき、ご一緒に礼拝できる機会になれば幸いです。

北関東教区宣教部 司祭 鈴木伸明

**日立聖アンデレ教会**

岡田 令子

海のみえる丘の上にある、小さな教会が日立聖アンデレ教会です。今年の秋に創立110周年を迎えます。110年の間には幾つかの戦争や災害もありました。東日本大震災では教会の天井は崩れ落ち、敷地には地

割れもありましたが震災一ヶ月後に京阪神ボランティアチームを迎え入れ、牧師館はいわき市の被災者支援活動の基地局となりました。山あり谷ありの110年の歴史を刻んだ日立聖アンデレ教会ですが、太平洋に『日が立ち昇る』日立市の名のように明るく元気な信徒達で受け継が



れて来  
 ました。  
 「おらが  
 教会」

への愛  
 が強い  
 信徒た  
 ちが多  
 いのも  
 自慢の  
 ひとつ

です。人口減少でなかなか新来者も増えず少人数の教会ですが、信徒一人一人が持っているタラントが濃い教会でもあります。荒廃した敷地をなんとかしようと美味しいトマトやスイカを耕作したり、古びた礼拝堂を美化しようとステンドグラスの窓を作成したり…美味しい物や素敵なお物を作ったり、楽しいことを考えた

り、「だっぺー!よかつぺー!そうだっぺー!」と元気いっぱい教会です。元気だけでなくオールボーン製のオルガンもあります。オルガンや口笛のコンサートもいたしました。口笛コンサートは教会の外の鳥達も参加するそんな牧歌的な教会です。海と緑と笑いがいっぱい教会です。隣接のアンデレ会館(旧・教会付属二

葉幼稚園)ではこれから色々なイベントを計画中です。皆様のお越しを心からお待ち申し上げます。

**水戸聖ステパノ教会**

清水 英承

今の時期、水戸の街は借楽園や千波湖周辺の梅の花を観にたくさんの方々が訪れます。また、徳川家所縁の地である水戸には多くの史跡もあり、弘道館や水戸城跡などの名所巡りも楽しめます。街の中心地には、特徴的な形の水戸芸術館のアートタワーが立っており、私達の水戸聖ステパノ教会もその近くにあります。

2011年の東日本大震災では教会も大きな損傷を受けました。聖堂正面の御影石の壁が崩落して鐘楼も損壊し、それまでの生活が一変しました。復旧までの間、幼稚園の遊戯室を借り





て礼拝を捧げることもありましたが、たくさんの方々のお祈りと支援のおかげで無事復旧することができました。改めて感謝申し上げます。2015年には新たな牧師館も完成しました。

昨今のコロナウイルス感染拡大防止のため、教会内ではなかなか交わりのときを持つことができませんが、日曜学校は感染対策しながら継続しており、子供達の元気な声も聞こえます。いずれ感染が収束すれば、子供達が楽しみにしているパーベキューや、折々の行事も再開できるようになると思います。4月からは新たに西海雅彦司祭をお迎えして、これまで以上に前向きな歩みが続けていくことができると思います。水戸にお出かけの際はぜひ教会にもお立ち寄り下さい。

土浦聖、ハルナバ教会

城下町の教会

松の巨木が水面に枝を伸ばし、その姿を映している。私たちの土浦聖ハルナバ教会は亀城公園と呼ばれる土浦城址の二之丸の堀に面した武家屋敷跡に建つ。周辺には白壁の蔵と格子戸が残る中城通りがある。徳川幕府で老中をつとめた土屋家九万五千



石の城下町、それが土浦である。城下町に特有の曲がった道筋、土蔵のある古い商家など、亀城公園周辺は昔日の面影を残している。教会の聖堂は昭和初期に聖別された歴史ある建物であり、銅板で葺かれた緑の尖塔が街並みのアクセントとなっている。外観に劣らず目を楽しませてくれるのは、聖堂内部から見上げた木造の小屋組み、風格ある説教壇、そして代々使われてきたピュー（Pew…信者席）である。メモリアルコーナーには大正時代の信徒一同が亀城公園のシイの巨木（県指定文化財）の前で写した記念写真があり、信仰の先達たちの姿を偲ぶことがで



きる。他に、古い革装の大判文語聖書、修復され現役で活躍するリードオルガン、そして子羊を抱くイエス・キリストのステンドグラス等が我が教会の自慢である。コロナ禍の現在、感染対策を講じて礼拝を継続しているが、バルナバ岸本望執事の発案により、参列できない信徒のためにFacebookでライブ配信も行っている。興味を持たれた方は、まずFacebook上で当教会をご訪問いただき雰囲気を感じてほしい。

下館聖公会

廣瀬 清

東北の阿武隈高地から八溝山系を経て台地が終わる突端部に人口約10万人の筑西市（旧下館市）が在る。台地の終わる所にJR水戸線・真岡鐵道・関東鉄道常総線の下館駅が在り、また道路網では国道50号線（東西）と国道294号線（南北）の交点が下館駅北500mに在る。台地の東は五行川と小貝川が、台地の西は鬼怒川が南北に流れる。鬼怒川の西には結城紬で有名な結城市が在る。下館駅から北へ約1km行くと、下館小学校の隣に来年創立110周年を迎える下館聖公会と下館幼稚園が在る。矢萩栄司司



祭が14年間司牧され、志賀清光司祭、安藤菊蔵司祭、伊勢恭也司祭、ネリー・マキム宣教師、小柴早次司祭、佐藤忠輝司祭、広田勝一主教、小林正男司祭、瀬山会治司祭、鈴木伸明司祭、末永恵司祭、秋葉晴彦司祭という歴代の聖職の流れを受けられた。下館聖公会は小さな群れではあるが各地に多くの先達を輩出し、「子育て教会」とも呼ばれる。下館で初めて設立された幼稚園である下館幼稚園の園舎と一体の教会礼拝堂は、幼稚園遊戯室との隔壁のスライディング・ウォールを開けることで大人数の礼

拝が可能となり、北関東教区の合同礼拝の会場となったこともある。交通の便から茨城・栃木伝道区の聖金曜日の礼拝の会場となっていた。小さな教会が大きな器となつて主の御用にお仕えしている。皆様の御来訪をお待ちしています。

### 「小山聖ミカエル教会」と

#### 「小山祈りの家」

中山 智子

「小山聖ミカエル教会」は関東平野の中央に位置する教会です。近くを利根川の支流である思川が流れ、東北新幹線の停まる小山駅から教会へ向かう大通りには、思川桜の並木が続きます。歴史の古い教会ですが2018年に建て替えられ、陽射しあふれる硝子の十字が印象的な白垂の礼拝堂で、私たちは祈りをささげています。信徒数は少ないものの、みな仲が良く、協



力しながら毎主日の礼拝を守っています。聖堂に飾られる季節の花が可憐で、毎週たのしみに愛でていきます。この教会には「認定こども園早蕨幼稚園」が併設しています。教会に通う折々に子どもたちのほほえましい様子を見聞きし、また日曜学校に集まるかわいい姿に接しながら、元氣をもらっています。

ミカエル教会から車で少し行つた所に「小山祈りの家」があります。

木々に囲まれた礼拝堂には宿泊施設もあり、静想したい人を温かく迎えてくれます。栗や梅の大木、竹林や藤など四季の姿が美しい

広大な敷地の奥には、先達の眠る教区墓地があります。春と秋に教区逝去者記念礼拝がおこなわれ、初夏には複数の教会の人々がここに集つて草刈りをし、合同礼拝をささげます。豊かな環境のもとで大人も子どもも素晴らしい体験ができます。

小山の教会はこのように、愛と自然に恵まれた、訪れた人が心豊かになれる、とても素敵な教会です。

### 【司祭の心】

#### 詩篇講話 上・下

北森 嘉蔵著  
教文館

2004年刊行

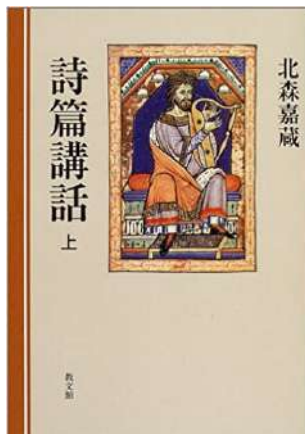
司祭 中川 英樹

2004年に教文館から初版刊行された『詩篇講話 上・下』を紹介します。著者の名は、北森嘉蔵。日本

が誇る、世界的に著名な神学者です。北森は1998年に天に召されましたが、その死後、6年経つて、彼が生前行つていた、小さな勉強会での講話がまとめられて刊行されたのが、この『詩篇講話』だと云われています。

この本の中に、このような、北森の言葉を見つけることができます。「わたしは解決の光を与えられないまま、未解決の闇の中でジツとしていなければならなかった。しかし、この闇の中に、少なくとも一人、一緒にジツとしている者がわたしと共にいてくれた。それが詩編詩人であった。わたし以上に苦しんだ人間が少なくとも詩編の中には居たのである。」

未解決の闇を抱えていた北森は、その闇の底で、その深みに沈んだところで、詩編に出会い、貪るように



読んだと述懐しています。それは、北森が詩編の中に、自分よりも先んじて苦しんだ人の姿を、そして、その詩編詩人が、彼の苦しみを、一緒に、ジツと共にしてくれる存在であることを見出したからにほかなりませんでした。北森は、どこまでも詩編詩人と自らを重ねながら、詩編を読み込んでいきます。

北森にとつて、「わたし以上に苦しんだ人間が少なくとも詩編の中には居たのである」と語る、その「わたし以上に苦しんだ」詩編詩人を通して北森は神に触れます。北森のメッセー

ジは素朴です。たとえ、深い淵の底に落ちようとも、そこに神は居られる。どのような状況であれ、神は、わたしたちを見捨てられることはない。そして、その神は、その暗い底に、一緒に沈み、その痛みと哀しみを共にされる神であること。傷ついた今の、この世界の現実の直中で、取り戻したい希望と信頼とが、この本には記されています。

今日も主と共に歩む、恵みと感謝に満ちた一日でありますように。主に在りて。



## 退職に寄せて

司祭 アタナシオ 佐々木 庸

東京教区の聖職とされたのは後藤真主教によって執事に按



手していただいた時からですが、聖職候補生との間に当時は今は見られない実習聖職候補生という期間がありました。そうなる前に、教区の中・高生会で楽しんでいました。現在もご健在なI司祭、S司祭がチャプレンでした。中学3年生の夏、清里での教区合同キャンプから大人に囲まれていた所属教会から視野が広まりました。八ヶ岳の大自然の中で、神様と人との出会いから幼いながらも導かれて行きました。激動の高校時代でしたが、大学生になって聖職への道を志して行きました。聖公会の道学院への歩みは後から考えると足りない事だらけでした。後年、聖職養成委員に加えていただきましたが、それも冷汗をかきことばかりでした。

## 他教区での経験

執事に叙階されてから飯田徳昭

主教に招かれ九州教区で司祭にして頂きました。以来13年間、長崎、直方（のがた）大分、と北関東教区と現在直面している事を体験致しました。東京なら20〜30分で隣の教会に行けますが、北九州を除いて車で1、2時間かかるのが常識でした。東京のように主日の午後から集まることは出来ません。教区会も一泊して行われます。最近のようにzoomで開催されない諸委員会は大変でした。如何に東京教区が恵まれているかは行って初めてわかりました。

## 友との再会

東京に戻って最初の教区会、教区中・高生会で一緒だったK君、Y君が信徒代議員として活躍していたり、教区聖歌隊で美声を響かせているMさんなど時間の経つのは早いものと思いました。影ながら中高生世代の働きを支援させていたのは、自分のささやかな経験があったからです。エクレシアとしての教会の集まりは時を越え、場所を隔てても主にあってつづけられて行く事を定年を前にして改めて思いました。

## 執事按手に寄せて

執事按手の恵みを受けて

執事 ヒルダ 藤田 美土里

主の平和を祈ります

昨年12月18日、聖マーガレット教会において公会の執事に叙任されました。これまでの歩みの上



に主の恵みと導き、たくさんの方々のお支えを心から感謝申し上げます。

あれから数ヶ月、これまでの日常が続きつつも、日々大きな変化を感じるこの一つに、聖餐式での執事の役割があります。祈祷書で「執事は、代祷・懺悔・奉獻・派遣のところに書かれており、文字数はわずかですが、これにより執事の自覚を促されています。以前は座っていたところを立ち、聴いていたところで福音書を伝える、何気なく見える変化が大きな影響を及ぼしています。緊張して慌ててしまったり、祈りに没頭してしまったり失敗をしつつ、司祭や会衆のみなさまにお支えいただきております。

また、この数ヶ月の間、コロナの

状況だけでなく世界の状況が大きく変わりました。核の脅威を含む戦争が世界を巻き込んでいます。私たちは本当に十字架の先に示された「主の栄光」を求め歩んでいるか、どれほど真剣にみ言葉を聴き、神を信じ、小さく弱くされた人々に寄り添われた主のみ心に従っているか、神を仰ぎ見、我が身を振り返る時を過ごしています。

3月12日（土）、聖アンデレ主教座聖堂にてセシリア高柳章江、ズナンナ中村真希両執事の按手式が行われました。この時、福音書朗読を務めました。自分の按手式を思い出し、改めて責務の重さをズッシリと感じ、緊張感がよみがえってきました。しかし、同時に主にあつて共に働く仲間と喜びを分かち合う時ともなりました。これからも、祈りを通して神と人々と繋がり、皆さまと共に主の栄光をこの世に表す者として遣わされる喜びを分かち合っていきたいと思えます。

## 執事按手を受けて

執事 セシリア 高柳 章江

今回、予想以上に多くの方から祝福の言葉をいただいていたことに驚いています。そして多くの方から「いい按手式だった」と声をかけていただきました。これはひとえに、按手式を準備

してくださった聖アンデレ主教座聖堂（ことに式典長を務めてくださった下条裕章司祭）、教区事務所の職員の方々、説教をするためにお忙しい中わざわざ時間をこじあけて北海道からいらしてくださった植松主教はじめ多くの方々のおかげと感謝しています。

私は按手式の前に3日間、黙想をしたのですが、黙想中、神父さんとお話する機会がありました。ローマ・カトリックは女性聖職を認めない教派ですし、私は年を取っているので、神父さんから見れば私はずいぶんおかしく見えるだろうなと思いました。それで、私はつい神父さんに「私は年を取っていて、今さら聖職に按手されるというのもおかしいですよね」といってしまいました。すると神父さんは「年を取ったなんて言わないでください。すばらしいことですよ。だって今は神さまと働こうなんて人、いないんだもの」と、すこし寂しそうに笑って励ましてくださいました。

按手は主教から手を置かれるとい



うことですが、式の直前、私は「主教は私の頭にどんなふうにも手を置くのだろう」と、気になりました。果たして主教の手は私の頭の上にとっと置かれたのではなく、かといってぎゅうぎゅうと押さえつけられたのでもなく、いい塩梅に置かれ、その感触は心地よいといつていいものでした。しかしながら、心地よいのになぜか「重い」手でした。その重みは私が背負った十字架の重みのようでもありました。

#### 按手の恵みを受けて

執事 スザンナ 中村 真希

2022年3月12日、神様のお許しを受け、高橋宏幸教区主教より執事に按手されました。これまでの長い道のりを支え、共にこの召命を歩んでくださった皆様に、心から感謝いたします。

最初に聖職候補生の志願を出してから9年弱、その間に様々な出来事がありました。ローマでの留学生活が予定より長引いた分、新しい出会いと交わり、経験を得られました。たくさんの方と学びの中で、時間をかけて育まれ、豊かにされてきたこの道のりがあって、時が与え

られ、按手を授かったのだと実感しています。

しかし、そのようにある意味では迷いなく歩んできたのですが、いよいよ按手が数日後に迫ったときに、急に不安を覚え始めました。あまりに無理なことをやろうとしているのではないかと、想像以上に大変な道に、わざわざ進むべきなのだろうか。

そんな気分のまま、前日のリトリートにはイエズス会の英隆一朗神父に来ていただき、指導していただきました。ローマに留学する前に「みことばをつるぎとして生きていくようにしっかりと学んできなさい」と言って送り出してくれたのが英先生でした。宣教・牧会に必要なことがすべて書いてある、ことに教役者は年に何回でもこれを読み、ここに立ち戻りなさい、とマタイ10章および18章を想いめぐらす機会が与えられました。得られた数々の示唆はここではとても書ききれませんが、私たちはあくまでも自分の能力や力のゆえにではなく、神様に送り出され、聖霊によって導かれているのであり、イエスの言葉と行いに倣って歩んでいくのだ、という大切な原点を改めて考える機会となりました。

私の召し出しの原点は、みことばに聞き、みことばに生き、みことばに仕

えるものとなること。必要なみことばが与えられ、ようやくそのことを思い出し、そのための一歩を踏み出すことを赦されたのだと思ったとき、按手の恵みは心からの喜びとなって



迫ってきました。

辛いとき、悲しいとき、憤りを感じる時、また嬉しいとき、楽しいときにも、常にみことばに立ち帰り、みことばを伝える者となれますように。これからもこの召命を共に祈り歩んでくだされば幸いです。



## 2023年日本聖公会 宣教協議会について

主の平和がありますように

日本聖公会宣教協議会実行委員会です。今後、各教区の教区報の紙面を定期的にお借りいたします。宣教協議会のテーマや具体的なプログラムについて、また1995年と2012年に開催された宣教協議会で協議されて分かち合われてきたことについてお伝えさせて頂きたいと思えます。

主イエス様は「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。」(ヨハネ15:5)と言われました。「ぶどうの木」であるイエス様とつながり、そこから伸びていく「ぶどうの枝」である日本聖公会に連なる皆様お一人お一人とご一緒に協議会の準備を進めていきたいという願いからタイトルを「ぶどうの枝だより」としました。第1回目は「2023年宣教協議会について」これまで準備してきた事についてお知らせいたします。

### これまでの経緯

2020年10月の日本聖公会第65(定期)総会において、

2022年11月に清里で宣教協議会が開催されることが決議されました。この決議をもとに構成された実行委員会は、オンラインミーティングを重ねて、準備を進めています。また、2021年9月9日(木)・10日(金)・10月7日(木)・8日(金)の4日間にわたり、各教区の宣教担当者オンラインにて意見交換を行いました。

本聖公会に連なる皆様お一人お一人との対話の中で、深められ多くの方々と一緒に、進められていくことが必要だと考え、実行委員会は1年間の開催延期を提案し、主教会と常議員会で承認を頂きました。

アンケートへのご協力ありがとうございました。

2021年4月から6月にかけて、各教区・教会・関連施設・管区の委員会の皆様には、アンケートにご協力頂きました。それは2012年宣教協議会からの「10年の実り」や、様々なご意見をお寄せいただくものでした。アンケートの回答は、実行委員会にて常に参考にさせて頂きたいと思えます。尚、アンケートの回答結果については「2023年日本聖公会宣教協議会ブログ」にて公開されていますのでご覧下さい。



新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実行委員会は、対面での集まりを一度も持つことができていません。そのような状況下で、また2022年の新型コロナウイルス感染状況が見通せない中、大勢が対面で集まることが可能かどうかという、プログラムを作る上での課題がありました。そして何より、皆様との対話の場の設定が必要でした。宣教協議会の準備は、各教区や教区、諸施設も含め、日

これからのご予定

宣教協議会の実施にあたっては、以下のことを大切にしていきたいと思えます。また、今後の予定についてもお知らせ

せします。

- 皆様と想いを分かち合い、共に祈り、つながるプロセスを大切にします。宣教協議会は1年半先のことではなく、すでに今、この瞬間に始まっていると、考えていただければと思います。

- 「ぶどうの枝だより」として、『管区事務所だより』、各教区報や、ブログ、Facebookなどで情報を発信していきます。

- 「ぶどうの枝分科会」として、2か月に1度、様々なテーマの分科会(管区の各委員会代表者、青年委員やU26運営委員、各教区青年担当者、関連施設チャプレンなど)を行います。

- 「ぶどうの枝協議会」として、2022年8月22日(月)〜23日(火)に、各教区宣教担当者や管区諸委員と実行委員会が対面で集まり、今後の道筋を分かち合う予定です。

- 宣教協議会の最終日としての全体会を2023年11月10日(金)〜13日(月)の3泊4日、清泉寮(山梨県清里)にて開催いたします。

### 《信徒リレーエッセイ》

コロナ禍でも得られているもの

神愛教会

高橋 美恵子

コロナ禍初期の報道で残念にも逝去された女優さんの報道に衝撃を受けました。救急搬送時には恐らくご家族の誰もが想像しなかった筈の帰宅の姿でした。人の手から家族の手へ：ではなく、まるで物かのように玄関先に置かれた台へ。台からそっと胸に抱えられた夫君の姿に胸が締め付けられました。何と非情な病でしょう。

神愛教会では礼拝休止中、再開後もお世話してくださる方達のお陰でリモート礼拝が続いています。直の陪餐はできませんが、心は伝わって来ます。礼拝後の近況報告では夫々が抱える痛みと支え合いを感じます。私に不安定な心を花の揺らぎに例えて話すと、当日の司祭様から《私達は揺れてよいのだ。神も苦しむ私達と共に激しく揺れながら生きて下さる》旨の資料と便りを戴きました。非情な病の中も『一人ではない』と励まされています。

「私たち自身の貧困に対する『まなざし』を変える」

貧困は、貧困になってしまった個人の責任ではなく、私たちの社会の責任において解決すべき問題

2月5日(土)に、渋谷聖公会聖ミカエル教会ヒルダ・ミッシェル講座「日本の貧困問題と今私たちにできること」をオンラインで実施しました。テーマは、生活に困窮している方々と共に生きるため、現状を知ることです。東京教区をはじめ、他教区、他宗教、海外から70名の方に参加いただきました。

講師には、一般社団法人つくり東京ファンド代表理事、認定NPO法人ビッグイシュー基金共同代表、立教大学大学院客員教授の稲葉剛氏を招きました。稲葉氏は、1994年より路上生活をしている方の支援活動を行なってきました。現

在のコロナ禍では、住まいがない方への住宅支援、所持金がなくなり困っている方のもとへ駆けつける緊急支援、本人負担がない携帯電話の貸出、夜に路上生活をしている方への声かけをする活動、行政への働きかけなどを行なっています。

日本では、「ホームレス」というと路上、公園、河川敷など屋根がない場所で生活している状態とされています。海外では、ネットカフェ、友人宅など屋根はあっても家がない状態も「ホームレス」と考えられています。

この家がない状態は、住民票もない状態であることから、人間関係の喪失にもつながりやすく、給付金を受けられなかったり、生活保護の差別的な運用など、公的サービスからも排除され



る傾向にあります。

そして、コロナ禍で貧困が拡大しています。アルバイトや派遣社員として働いていて、ひと月の仕事が全くなくなってしまった方、コロナに感染し、退院後に雇い止めになってしまった方、カフェの雇われ店長をしており、自宅の家賃が支

払えなくなつたため、店に寝泊まりしている方などがありました。ひとりひとりはそれぞれの人生があり、たまたま貧困状態に陥らざるをせざるを得なくなつたということに改めて認識しました。それゆえ、誰にでもあるきっかけで厳しい状態になる可能性がありま

す。そのような状態に陥らざるを得ないような社会を、そのような状態に陥つたとしても容易に抜け出せるしくみが無い社会を私たち一人ひとりがつくつていくことを自覚しなければなりません。

路上生活をしている方の支援をしている団体はありますが、団体だけで全ての方を網羅し支援することは難しいといえます。私たち一人ひとりが、現状を理解し、「貧困」に対するまなざしを変えることが重要です。

当日の講演の様子も動画でご覧いただけます。ご希望の方はご連絡ください。今後は当日参加された方、動画を視聴した方と感想を共有し、私たち一人ひとりに、また教会になにができるかを考えます。ぜひ一緒に考え、行動できたら嬉しく思います。

渋谷聖公会聖ミカエル教会

山中大輔

次回、夏号  
7月24日 発行予定

(7月22日記事更新)

ちょっと聖書、ときどきユーモア (五十一)

1. 今風に

信徒A 「知ってる、昔は主教のことを監督と言っていたんだよ」

信徒B 「そうか、それなら今度は、その主教をもっと今風な呼び方に変えたらどうだろう」

信徒A 「どう変えるの?」

信徒B 「BIG BOSS (ビッグボス)」

2. SDGs

信徒 「先生、今日の説教はなんとなく前にも聞いたような気がしたんですが」

牧師 「私も、何かSDGsで出来ることはないかと思ひまして」

信徒 「どういことですか」

牧師 「説教のリサイクルです」

3. 誤解を招く

信徒A 「たまたま罪を犯すと地獄に落ちるといような人を脅かす言い方をしている教会があるよね」

信徒B 「そういう言い方はあまり好きじゃないな」

信徒A 「そう、神さまという存在を誤解させるよね」

信徒B 「神さまは人の罪をゆるす、でも教会は人を罪でゆるす、って思われるよ」